慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会と自然との平衡関係と「生産力」
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.11 (1924. 11) ,p.1579(41)- 1605(67)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241101-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此の一般の風潮に促かされ、斯學を研究するものは年々進んで人間の性質が境遇に因つて變化するものなる事、隨て其の人間の品性が財の生産、分配及消費に對して相互の關係を有するものなる事に多大の注意を拂ふに至つたのである、乃ち此の新傾向の最も重要なる表彰としてジョン・スチュアート・ミルの大著作なる經濟原論が現はれたのである云々。（マーシャル原論第二版六三―四頁）

ミルの原論の來歴は大要斯くの如きものであつて其の書の前半（生産論の部分）は十九世紀前半までの舊學說を代表し、其の後半（分配論の部分）は十九世紀の後半に於ける新思潮を代表したものである、マーシャルの見る所はミル自身の云ふ所よりは却つて其の當を得たるものであらう。

雜　錄

社會と自然との平衡關係と「生産力」

伊藤秀一

一

Karl Marx が其の唯物史觀の公式に於て說く所に遵へば、法制上及び政治上の上層建築が據つて以て立つ所の、又一定の社會的意識形態が之に適應する所の眞實の基礎は、社會の經濟的構造、換言せば人間が彼等の生活の社會的生産に於て入り込む所の一定の必然的の彼等の意志から獨立したる關係、即彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係の總和である。物質的生活の生産方法は一般に社會的政治的精神的の生活過程を條件づけるものである。（Marx: Zur Kritik der Politischer Oekonomie. Vorwort. LV）斯くて Marx に依れば人間は新なる生産力を獲得すると共に其の生産方法を變化し、又生産方法を變化すると共に總て彼等の社會的關係を變化するが故に、畢竟社會の生産力の變動は社會一切の變化の根本的原動力であると言ふ事が出來るのである。從つて先づ此場合の生産力とは如何なるものを意味して居るのである乎又如何なる關係に於て生産力の變化が生産方法を變化し從つて一切の社會的關係を變化すと言ひ得られる乎が問題とならなければならないのは當然である。然るに Marx の唯物史觀に對する幾多の批判的文獻は此等の諸點に關する解釋に於て甚だ區々であつて、此の事情をかの Tugan-Baranowsky の如きは敢て次の如く斷言して居る。「殆ど總ての批評家又は註釋家

は此の有名な學說に自分自身の說明を與へねばならない。此の事は先づ、毫も其の觀念の正確なる定式化の爲めに苦心せざりし所の此學說の創設者の側に於ける、學說表現の形式上の缺陷に基くと謂ふ可きである。從つて批評家にとつては自分自身の推測に基いて探究し、一定の定式化を與へ、因つて以て自己の批評的勞作の爲めに確固たる基礎を得るより他はないのである」。と（Tugan-Baranowsky : Theoretische Grundlagen des Marxismus. 1905. SS. 1-2）果してMarxが毫も其の觀念の正確なる定式化の爲めに苦心しなかつたか如何かは遽に之を斷ずる事が出來ないとしても、如何に多くの批評家や祖述者が各々自身の推測に基いて之に一定の定式化を與へんとしつゝある乎は此種の文獻を繙く毎に直ちに逢著する所であつて、後學をして其の去就に迷はしむる事甚だ大であると言はなければならない。

先づ一切の社會的變化の根本的原動力なりとせらるゝ生產力とは果して何であるか、其れは單なる技術的概念に過ぎないものであるか。或は廣く自然的及び社會的の要素をも併せ含むものと解せらる可きであるか。例へば和蘭の急進的マルクシストの指導者 Hermann Gorter は技術を以て生產力と殆ど同意義であるかの如く取扱つて居る。曰く「技術、勞働器具、生產力、是が社會の根蔕である。是が此の巨大にして複雜なる社會組織の存立する本來の基礎である。然るに人間は斯の如く物質上の生產方法に從つて社會關係を作ると同時に、亦此の關係に從つて、其思想を作り其世界觀を作り其根本原理を作る。……即ち我々の物質關係のみが技術に依て左右され、勞働に依つて支持され、生產力に依て支持されて居るのではない。我々は我々の物質關係の中に於て又此關係の下に於て思考するが故に、我々の思想も亦直接に物質關係に依つて左右され、從つて間接に生產力に依つて左右される」。（堺氏譯、唯物史觀解說 一三—一四頁）又曰く「（一）勞働技術、即ち生產力が社會の基礎を作る。……（二）技術は絕えず發達する。生產力、生產方法、及び生產關係、財產關係及び階級關係も亦それに從つて間斷なく變化する。故に人の自覺即ち法律、政治、道德、宗敎、哲學藝術に對する思想觀念も亦生產關係及び生產力と共に變化する。（三）新しき技術は其の進步の或る階段に於て古き生產關係及び財產關係と矛盾撞著を來す。結局新しき技術が勝つ云々」。（同上二一—二二頁）

然るに Heinrich Cunow の見解に遵へば Gorter の斯の如き解釋は技術、生產力、生產方法等に關する概念を雜然混同する事に依つて全然 Marx の眞意を誤り傳ふるものである。「Marx が此の語を用ふる限り技術と言ふ事は何等かの生產物を生產する場合に於ける全體の處置方法であり、從つて道具とは勞働行程に適用さるゝ技術的手段の一に過ぎない。然るに Marx が生產力と言ふのは社會的生產行程に入り込む所の總ての力、即ち機械力以外に人間や動物やの勞働力並に自然力を意味するものなるが故に、技術と生產力とは愈々以て同意義ではない。更に技術が社會の基礎だといふ命題は何を意味するものであるか。技術が社會に其の生活維持及び繼續の爲めの手段を供するといふ意味であるか。それも Marx の立脚點から全然正當ではない。此等の手段を供するものは技術ではなくて、一定の技術を通して自然的產物の上に勞働力と自然力とを、利用することから成立つて居る所の生產行程だからである。Marx は何處にも、技術

が社會の基礎であるとは言つて居らない。」と、(H. Cunow: Die Marxische Geschichts-Gesellschaft- und Staatstheorie, II. Band. 1923. SS. 224-225.)

即ち Cunow の解釋に依れば生產力とは社會的生產行程に入り込む所の總ての力、即ち自然と勞働と技術との三つの生產力の綜合である。換言せば之等のものが生產行程を構成する所の三つの要素である。此の行程を Marx が「本來の目的たる勞働對象の變化を勞働要具に依つて實現する所の人間の行爲」と言つて居るのである。(Cunow: a. a. O. S. 163) 從つて生產力と技術とを同視するのは此の生產行程の構成要素の一を其の全體と混同する事に他ならない。「社會的勞働行程は技術のみの作用に過ぎないとか又は技術に依つてのみ左右せらるゝとかいふ事を Marx は決して言つて居ない。彼が眞に立張する所は、生產行程に適用されたる技術なるものは、生產上の發展がどれ程迄に進歩したか、就中人間がどれ程迄に、彼の欲望に適する如く自然物を變へる事を知り、又自然力を利用する事を知つたかの尺度として役立つといふ事である。Barth が『工藝學は自然に對する人類の能動的關係即ち人類生活の直接の生產行程を開示する』と云へる Marx の句 („Das Kapital." Volksausg. S. 317) から、生產行程は技術にのみ基く、從つて生產方法は技術的經營方法と同一であるとの結論を引出した事は洵に理解し難い所である。他の場所では社會的勞働行程を以て人間と文化との間の行程及び人間と自然との代謝機能であると指示して居る所の Marx が、右の句で何を言はんとして居るかといふ事は、多少とも Marx の生產方法の概念を理解して居るものには明白である。即ち此句の意味する所は、工藝學の狀態は人間が其の生活維持手段の全體を獲得するに際して、若くは Marx の表現に遵へば彼等の生活の生產に於て、如何なる程度迄自然物及び自然力の利用に達して居るかを示して居るといふ事である」。(Cunow: a. a. O. SS. 170-171) 更に又 Cunow の見解に依れば敍上の生產行程に於ける三つの要素即ち勞働力と自然と技術とは此行程に於て協力的に作用する許りではなく、夫等は各々の狀態と作用とに依つて相互的に條件附けられて居る。「其の純然たる肉體的勞働なると精神的勞働なるとを問はず、勞働力の發達は夫等が向けらるゝ所の自然的對象に依つて左右せらるゝ如く、夫等が利用する所の勞働要具（技術）に依つて左右せられる。……他方勞働力は少なからざる度合で再び自然並びに技術の上に反應する。例へば人間が耕作に從事し、動物を飼育し、森林を開拓し、殖民を行ひ運河を掘り沼澤を乾燥するといふ樣な事に依つて同時に次第次第に彼を圍繞する所の自然を變化する。併し斯の如く自然を變化するためには人は彼が豫め發見し且つ其の利用を知る所の、發達せる技術的勞働要具を必要とする。だが此の理由に依つて、屢々主張せらるゝ如く、技術が聰明なる人間の純然たる精神的勞作であるとは決して言はれ得ない。一般に技術の發生と其の應用とは再び又自然的條件に（同樣に社會的條件）に結び付けられて居る。其の地中に鐵礦を含有しない地方に於て決して鐵の技術を見出し得ず、又廣漠たる草原に於て決して航海術の發生し得ざるは當然である。一定の技術の發生のみならず其の應用も亦一定の自然的社會的關係の下に於てのみ可能である。斯くて以上三箇の生產力の間には密接なる關係が存在し、夫等は相互に條件となり相互に影響し合つ

て居る。夫等の協力的作用の中に初めて生產行程が起る。從つて此の力の一部例へば自然的要素若くは技術を生產行程から抽出して、之を單純に、生產行程其物と同樣に考へるのは不合理である。こは一部を全體と混同するに他ならないからである。」と（Cunow: a. a. O. SS. 164-165）

以上甚だ簡略乍ら Marx の生產力の概念に關する兩極端の解釋の一例として、技術と生產力とを殆ど同視する所の Gorter の見解と、之に反して生產力を最も廣く解釋して自然的及び社會的の要素をも之に附加せんとする Cunow の見解とを對立せしめ、就中前者に對する後者の批評反駁の理由を一瞥した。然るに Bucharin かその一九二一年の著作「史的唯物主義理論」（„Theorie des historischen Materialismus"）に於ける考察を以てせば、Cunow がかの技術を生產力や生產方法と混同する所の Gorter 等に對して爲せる反對論は洵に正當ではあるが而も此點に關する彼の解釋も亦必ずしも承服し能はざるものであると言ふ。而して茲に先づ提供されたる問題は、自然力が、Cunow の解する如く、他の二つの生產力即ち技術及び勞働力と共に生產行程の一構成要素として所謂生產力の中に包含せらる可きものであるか如何かといふ事、換言せば、自然が Marx の所謂生產行程に對する關係に於て如何に解釋せらる可きものであるかといふ事である。

凡そ Marx に遵へば自然は勞働と共に若くは「土地と勞働者は」同樣に「一切の富の源泉」である。（Marx: Das Kapital. I. Bd. S. 472 參照）此の見解に就てはかの著名なる Gotha 綱領批評文の冒頭に於て「勞働は總ての富及び總ての文化の源泉である」といふ命題を駁して彼は次の如く述べて居る。「勞働は總ての富の源泉ではない。自然も其れ自らが一の自然力たる人間の勞働力の發現に過ぎない所の勞働と同じ程度に於て使用價値の源泉である。（而して物質的富なるものは實に此の使用價値から成立つて居るのである。）……人間が本來自然に對し即ち總ゆる勞働要具及び勞働對象の第一の源泉に對し所有者としての關係に立つ限りに於て、即ちそれを自己に屬するものとして取扱ふ限りに於て、彼の勞働は使用價値從つて又富の源泉となる。」（„Neue Zeit" 9 Jahrg. I. S 563）然らば茲に勞働と共に一切の富の源泉なりとせらるゝ所の自然が、かの生產行程といふものを通じて、社會に對して如何なる關係に立つて居るものであらうか。之れ實に Bucharin が前記の著述の第五章「社會と自然との平衡關係」（"Das Gleichgewicht zwischen Gesellschaft und Natur"）に於て關說する所である。彼は又自ら生產力の意義を明かにすると共に、一切の社會的現象を考察するに當つて何が故に先づ生產力の分析解剖から出發せねばならないかを說明して居る。以下摘記する所は其の所說の大要である。

二

社會を一の組織と考へれば外界の自然即ち特に我々の地球は――其の一切の自然性を含めて――社會に對する環境である。此環境の外に人類の社會は考へ得られない。又自然は人類社會の爲めに生存維持の環境を形成し此の事に依つて人類の生活は確保せられて居る。併し乍ら人が自然を目的論的に解釋して人間が自然の支配者であるかの如く考へ、自然を彼に適應せしめ、其の一切の物を人類の欲望に適應せしめて考へるといふ事は誤りである。實際上自然は屢々甚だしく人類を破壞し自然の支配者の手に殆ど何

物をも殘さないからである。唯人類は長きに亘る所の艱難なる自然との鬪爭の行程に於て初めて自然を制御し得るに過ぎない。

勿論生物の一種屬としての人類と人類社會其物とは、自然の產物であり、且つ此の巨大なる無限の總體の一部に過ぎざるを以て、人は決して自然の外に免れる事は出來ない。人間が自然を征服した時ですら彼は自然の法則を彼の目的に利用する以外の事は何もして居らない。故に自然が人類社會の全發展に對して如何に甚だ影響せざるを得ないかといふ事が理解せられるだらう。我々は先づ自然と社會との間に存在する所の關係、並に如何なる形で自然が人類社會に影響するかの研究に入るに先ちて、如何なる方面に於て自然が最も多く人類に接觸するかを注視し樣う。

Marx は言ふ、「人類に必需品を、直ぐに間に合ふ生活資料を最初供給する土地（其中には經濟的に水も含まれる）は人類の援助なしに、人間勞働の一般的對象として存在して居る。勞働によつて只全地球との直接の聯絡から引離されるに過ぎぬ總ての物は天然自然に存在する勞働對象である。即ち其の生活要素たる水から引離され漁られる魚、未開森林に於て倒伐されたる木材、其鑛脈から引裂かれる粗鑛などがそれである。…土地は彼の本來の必需品室であると共にまた彼の本來の勞働要具庫である。土地は例へば彼が依つて投げたり、摺つたり、壓したり、切つたりする所の石を彼に供給する。」（Marx: Das Kapital. Bd. I Hamburg, 1914. SS. 141-142）自然は採鑛、狩獵、耕作といふ樣な勞働部門に於ける直接の勞働對象である。換言せば自然は進んで加工し得可き原料並に一聯の生活要具を決定する。人間が自然との鬪爭に於て自然の法則を利用すると言ふのは斯の如き場合に於てである。「彼は諸々の物を權力手段として他の物の上に自身の目的に從つて作用せしめる爲に夫等の物の機械的、物理的、化學的諸性質を利用する」。（ebenda. S. 141）人間は蒸汽力や電力やを利用し、引力（重力の法則）其他のものを利用する。以上の如しとせば、一定の場所一定の時に於ける自然の狀態が人類社會の上に影響せざるを得ない事は明白である。氣候（濕度、風力、溫度等）、土地の構成狀態（山脈、溪谷、水の分布、水流の性質、金屬、鑛石等の存在如何）、海濱の性質（若し土地が海に面して居るならば）、陸地と水との分布狀態、特殊の動植物の存在、等――此等が人類社會に影響する所の主要なる要素である。大陸に於て漁獵や捕鯨が營まれ得ないと同樣に山岳に於て耕作を考へ沙漠に於て山林經濟を考察することは出來ない。土地の寒暖に依つて人間の生活狀態の左右せらるゝのは當然である。地中に金屬を包藏せざる所では斯の如き金屬が不意に天空から降つて來る事もなく又は之を發明する事の出來ないのも亦當然である。（SS. 112-114）

斯くて、若しも人が一の組織に就いて語る場合には、此の組織の變化の原因を其れが環境に對する交互關係の中に求めねばならないといふ事を我々は知つて居る。同樣に、其發展（其の組織の進步、停滯又は崩壞）の根據すらも謂はゞ當該組織が其の環境に對して如何なる交互關係にあるかといふことに倚據し、此組織の變化を招徠する所の原因も亦此の交互關係の變化の中に求む可きであるといふことを知つて居る。（S. 116）然らば不斷に變化する所の社會と自然との間の交互關係を何處に求む可きである乎。自然に對する人類社會の適應行程は何處に其の

表現を　出し得る乎。換言せば、何處に社會と自然との流動的平衡關係の狀態が存在して居る乎。

三

人類社會は其の存續する限り物質的のエネルギイを自然から掬汲して來なければならない、然らざれば社會は存在し能はぬからである。社會がよりよく自然に適應するに從つて愈々益々より多くのエネルギイを自然から掬汲し來り且つ之を己れのものとする。其の自然より掬汲し來りて己れの有とする所のもの丶量が增大しつ丶ある時に、初めて我々は社會が一の發展を爲しつ丶あると言へる。又例へば總ての企業、即ち其の工場に於けると、鑛山に於けると、鐵道に於けると、森林田畑に於けると、或は其の海陸何れのものなるとを問はず、此等一切の勞働が一度び休止せるものと假定すれば、其時社會は一週間とは長く存續する事は出來ない。過去の蓄積に依つて生活し得るためには人は其等を輸送し運搬し分配しなければならないからである。

人は土地を耕作して小麥や裸麥や玉蜀黍やを收穫する。彼等は家畜を飼育し、棉花や大麻や亞麻を栽培する。彼等は森林を伐採し、石を切り出す。斯の如き方法で彼等は其の衣食住の欲望を充足せしめる。彼等は又地中から石炭や鐵鑛を採掘して鋼鐵の機械を製造し、其の助けに依つて樣々な方針の下に益々深く自然の中に穿入し、全地球を一の巨大なる工場に變へる。其工場で人は鐵を鍛へ、旋盤を回轉し、鑛山を發掘し、强大なる恐る可き機械を靜かに運轉し、隧道を以て山脈を縱斷し、巨船によつて太洋を橫斷し、空中を橫切つて貨物を運送し、地球を軌道の網で覆ひ海底に電纜を据へる。――普く到る處に於て、彼等は其の捕獲要具を手にして先づ暄騷の街衢より初めて遙か僻隅の地に至る迄蟻の如くに馳け廻り、斯の如くして其の「日常の儘」を得乍ら自らを自然に適應せしめ、而して自然を彼等に適應せしめる。自然の一部、環境、即ち我々が茲で外界の自然と名付くる所のものは、他の部分、即ち人類社會と對立する。而して全統一體の此の二つの部分を連結する所のものは人間の勞働行程である。「勞働は先づ人と自然との間の一行程である。即ち人が自然との其代謝機能を彼自身の行爲に依つて仲介しつ丶調節し管理する所の一行程である。人は一の自然力として自然物質其物に對立してゆく」。(Marx: Das Kapital. Bd. I. Hamburg, 1914. S. 140) 社會と自然との直接の連結即ち自然からエネルギイを掬汲する事は一の物質的行程である。「人は自然物質を彼自身の生活に使用し得る形で占有する爲めに、自身の現身に屬して居る諸々の自然力即ち腕や脚や頭や手を運轉する」。(ebenda) 自然と社會との間の代謝機能の此の物質的行程は又環境と組織との間の、「人類社會に於ける諸種の外部關係」間の、根本的關係を形成する。

社會が存續し得る爲めに生產行程は不斷に更新せられねばならない。或る一定の時期に或る一定量の小麥や長靴や肌衣等が生產せられ、此等一切のものが此時期の間に消費し盡されるものと假定せば、生產は正に時機を誤たずして一の新しき循環運動を始めねばならない事は明瞭である。一の循環を以て他の循環を持續し踏襲する所の生產が不斷に繰返されねばならない。此の循環（所謂生產循環）の反覆といふ立場から考へられる所の生產行程は即ち再生產行程として表示せらるゝものである。此の再生產行程

が行はれる爲めに其の總ての物質的條件が再生產せられねばならない。譬へて言へば原料品を精製する爲めには織機が必要であり、織機を作る爲めには鋼鐵が必要であり、鋼鐵を得る爲めには鐵鑛と石炭が必要である。又鐵鑛や石炭を運搬する爲めには鐵道が必要であるから從つて軌道や蒸汽や機關車を必要とし、更に此等のもの、爲に倉庫や工場設備等を必要とする。略言すれば最も多種多樣なる物質的生產物の全系列が必要とせられる。然るに生產行程に於て此等の物質的生產物が或物は速かに或物は徐々に消滅して終ふといふ事を理解するのは容易である。織匠に食料が供せられ、織機は損耗し、倉庫は腐朽し、機關車は破損し、軌道や枕木が腐蝕するといふ樣に。故に又再生產に必要なる條件は、消費され、損傷し、消滅したる、總ての種々多樣なる物質を（生產の進行中に）斷えず補充するといふ事である。一定時に於て、人類社會は常に再生產行程の實行の爲めに一定量の生活必需品、建築物、工業製品、農產物、各種の交通手段等を必要とする。若しも社會が其の生活水準の低下するを欲しないならば、小麥や裸麥や石炭や鐵を初め、顯微鏡や白墨や本の表紙や新聞用紙に至る迄總て此等の對象を生產しなければならない。蓋し社會の物質的循環運動に歸屬する所の此等總ての對象は一般的再生產行程の物質的構成部分だからである。

要之、我々は社會と自然との間の代謝機能を物質的行程と考へる。そは正に一の物質的行程である、何故かと言ふにそれは物質的對象に關するものであるから。（勞働對象、勞働要具及生活必需品、總ては物質的のものである）。他方勞働行程其物は勞働者の肉體的活動に於て具體的に現はれる所の生理學上のエネルギイ（神經、筋肉等）の消費である。「此全行程を其結果即ち生產物の立場から觀察する時は、勞働用具及び勞働對象の双方は生產機關としてそして勞働其物は生產的勞働として現はれる。」（„Kapital" I. Hamburg. S. 143）

更に又、人間と自然との間の代謝機能は物質的のエネルギイを自然から社會の中に掬汲し來るの一事に存する事前述の如くである。故に人間のエネルギイを豫め消費するといふ事（生產）は、やがては社會に交付され（社會各員の下に於ける生產物の分配）且つ社會によつて其の有に歸せらる可き（消費）所のエネルギイを自然から掬汲するといふ事である。社會によるエネルギイの此の消費はより廣汎なる消費の爲の基礎を形作る。斯の如くして再生產の輪は回轉する。故に總括的に之を觀れば再生產行程は樣々な方面に連繫し其の總てが集つて一體を形成するものであるが、而も此の統一體の基礎は生產行程に存する。蓋し何人も認め得る如く人類社會が最も直接に最も密接に外界の自然と接觸するのは實に生產の行程に於てゞある。生產も分配も更に消費も再生產行程の內部に於て決定する。

社會的生產の行程は人類社會が外界の自然に對する適應である。併し其れは又同時に一の能動的行程である。若し何等かの動物が自然に適應して居るとすれば、彼等は自らの特質に從つて自然の材料として環境の不斷の作用に服して居るのである。然るに人類社會が適應して居るといふ場合には、其れが環境を自らに適應せしめ乍ら自らも亦環境に適應して居る。社會は材料として自然の作用に服するけれども同時に自然を社會の爲めの材料に變じる。例へば或る昆虫とか鳥類とかゞ此等の動物の住んで居る環境に對して保護色を持つて居る場合に、此事が、當

該有機體の何等かの努力の結果であるとか、又は外界の自然に及ぼせる彼等の作用の結果であるとかいふ事は決して考へ得られない。此場合に於ける斯の如き結果は、幾千年の經過の間に最も自然に適應せるものゝみが殘存し、結合し、斯くて無數の種類のものが單一なる種類のものに依つて驅逐せられたといふ事に歸せられる。人類社會は全く之に異なる。それは自然と鬪爭する。彼等は地を耕し、原始林を伐採して道路を通じ、自然の力を制御して之を自らの目的に利用し、地上の形態其ものを變化する。此は決して受動的の適應ではなくて一の能動的適應である。茲に人類社會と總ての他の動物種屬との間の本質的相違の一つが存在するのである。

(Bucharin. SS. 116-121)

四

斯くて社會と自然との間の代謝機能の行程は社會的再生產の行程である。此行程に於て社會は人間の勞働のエネルギイを消費して一定量の自然のエネルギイ（Marx が自然物質と稱べるもの）を獲得する。此際に生ずる所の其差額が明かに、全社會の發展に對して決定的の重要性を有して居る。收入が支出に超過するや否や。超過すとせば幾何の超過なりや。此超過の度合如何に依つて甚だ多くの事が左右せられる。

今、或社會が其の最も緊要とする所の欲望を覆はんが爲めに其の全勞働時間を提供せざる可らざるものと假定せば、此事は消費せらるゝ生活必需品の其量だけ正に斯の如き生產物が生產せられ其れ以上を生產しないといふ事を意味して居る。此場合に社會は或は生產物の餘剩量を生產するとか、或は彼等の欲望を擴めるとか、或は又何等かの新生產物を生產する爲めの時間の餘裕を持つて居ない。社會は艱難と窮乏の間にあつて僅かに手から口への生活を考慮するに止まる。人は食ひ盡したものだけを生產し、且つ勞働し得んが爲めに食するに過ぎない。全體の時間は唯之れだけの生產物の量を生產する爲めに適用せられる。社會は此の憫む可き生活水準に停まつて茲に欲望の生長は不可能である。

さて我々は、緊要なる生產物の右の量が、何等かの原因に依つて、全勞働時間を浪費せずして其の半分の時間で獲得せらるゝと豫想し樣う。（例へば原始時代の遊牧民が二倍だけ多くの動物の住む土地、或は二倍だけ豐沃な土地へ移住する如き、若くは彼等が耕作の方法を變へるとか新しい道具を發明するとかといふ樣な場合）、然らば其社會に於ては、彼等の從來の勞働時間の半分だけが全部解放せられる。社會は此の解放せられたる時間を新しき生產部門の爲めに、即ち新しい道具を製造したり、新しい原料を獲得したりする事の爲めに、更に進んでは或種の精神的勞働の爲めに適用する事が出來る。茲に新しき欲望の生長が可能である。茲に又初めて所謂精神的文化の發生と發展とが可能となる。而して若しも、今や一度解放せられたる時間が從來の勞働形態——今は一部門となれる所の——を完成する爲めに適用せられるならば、其の結果として、將來に於ては、從來の欲望を充足する爲めに、最早や全勞働時間の半分の量を消費するの必要なく、より少量の時間にて足るだらう。（此事は勞働行程に於ける新しき完成を顯著ならしめる）。斯くして其れに續く所の再生產の循環に於て順次より益々少量にて足るだらう。解放されたる時間は、次第に其れが增加するに從つて、第一に常に益々新しき道具、器具、機械の製造に適用せられ、第二に新しき生產部門新しき欲望に適應せられ、第三に精神的文化

就中種々の形で生產行程に結び付けられて居る所の文化の其の方面に適用せられる。

次に右の場合とは反對に、從來其の爲めに全勞働時間を必要とせる所のかの緊切なる欲望を充足せしむる爲めに、半分の時間ではなくて、二倍だけ多くの時間を要するものと假定すれば（例へば土地の疲弊といふ樣な原因で）、而も何等の新しい勞働方法も見出されず、又何等の變化も行はれない場合に於ては、其社會は退步し社會の一部は斯の如き狀態の下に必然的に衰亡す可きは明白である。

更に又我々は、豐潤なる精神的文化、多趣多樣なる欲望、無數に夥多な生產部門、繁榮せる科學と藝術等を持つ所の、既に非常に發達した社會が、其の欲望の充足に當つて一の困難に逢著したと想像し、其社會が何等かの原因に依つて現在の技術的設備を最早や支配する事が不可能になつたと假定し樣う。（例へば社會に間斷なき階級鬪爭――此鬪爭に於て一階級が他の階級を支配する事の出來ない所の――が起つて、其の發達せる技術を具有する生產行程が停止した場合の如き。）然らば茲に古き勞働方法への逆轉が生ずる。此時社會は從來の欲望を充足せしむる爲めに實に想像され得ない程非常に多くの時間を必要とするに違ひない。生產は減退し、古い形式が採用され、欲望は貶下せられる。生活水準は下降し、科學と藝術の花は凋落し、精神生活は萎縮し、社會は頽廢する。そして若しも此の逆行が廢せられなければ社會は遂に野蠻時代へ退步するであらう。

以上引證せる總ての場合に於て最も注意す可き點は何であるか。其れは社會の發展が社會的勞働の生產性に依て決定せられるといふ事である。勞働生產性の意味する所は生活必需品生產物の量と費されたる勞力の量との間の關係である。換言せば勞働生產性とは勞働時間の單位に對する生產物の量である。例へば一日とか一時間とか一箇年とかに働いて獲たる生產物の量である。若しも勞働時間に對する生產物の量が二倍に增加するならば人は勞働生產性が二倍に增大したと言ひ、若しも其れが半分に減じた場合には勞働生產性が半分になつたと言ふ。

社會的勞働の生產性が全く嚴密に社會と自然との間に全差額を表示するものだといふ事が容易に理解せられる。斯くて又社會的勞働の生產性は環境と組織との間のかの交互關係の指示器である。其は環境に於ける此組織の地位を決定し、其の變化は社會の全內部生活に於ける必然的變化の方向を指示する。

併し社會的勞働の生產性といふ問題を取扱ふに當つて我々は又かの勞働要具の製造に適用さるゝ所の人間の勞働の消費を支出として顧慮しなければならない。例へば若しも或る生產物が初め殆ど道具なしで唯〻手だけで作り出されて居る時に、人が非常に複雜な機械を使用して生產を行ひ、此の機械の應用に依つて此時二倍だけ多くの生產物を獲得したとしても、此場合には未だ全社會にとつて勞働生產性が二倍に增加したものとは言はれない。此時に我々は機械の製造に費されたる人間の勞働（もつと正確に言へば此機械の消耗に依つて生產物に移入せられたるあの勞働部分）を未だ算入して居ないからである。勞働生產性の增加は茲では二倍よりも少ないのである。（SS. 121-124）

五

既述せる所に依つて明かなる如く、自然と社會との關係は一方生產せられたる有用エネルギイの量と他方社會的勞働の消費との間の關係の

中に、即ち社會的勞働の生產性に依つて表示せられる。併し乍ら社會的勞働の消費は上述の如く二つの部分から成立つ、一は生產要具中に包含せらるゝ勞働であつて、他は現實の勞働即ち現實の勞働力の消費である。故に勞働生產性の量を其の物質的構成部分の點から考察して次の三つの量を擧げる事が出來る。第一、產出せられたる生產物の量、第二、生產要具の量、第三勞働力の量即ち現實の勞働者。之等三つの量は總て相互的に關聯して居る。若しも我々が生產要具の狀態が如何であるか、勞働者の狀態が如何であるかを知ると、又我々は或る一定の勞働時間で幾何が生產せられるかを知る事が出來る。此の二つの量に依つて又第三の量――產出せらるゝ生產物――が決定せられる。此の二つの量（即ち生產要具の量と勞働力の量）が我々が以て社會の物質的生產力と名付くる所のものを形成し包括する。若しも我々が或社會が如何なる又幾何の生產要具を處理し、幾何の又如何なる勞働者を有するかを知るならば、此事に依つて我々は又社會的勞働の生產性が如何であるか、如何なる程度迄社會が自然を支配し、如何なる程度迄社會自らが自然に適應して居るかといふ樣な事を知る。換言せば生產要具と勞働力の中に我々は社會的發展の程度に對する一の正確なる指示器を持つ。

然れども我々は此の事實の中に何物かをより深く洞察する事が出來る。其れは生產要具が又勞働力を決定するといふ事である。例へば社會的勞働の組織に植字機といふものが附加せられた場合には又其れに適應して訓練せられたる勞働者が生ずる。凡そ勞働行程の內部に協働する所の要素は人間と物體との堆積ではなくて一の組織である。此の組織內に於て各々の物と各々の人とが云はゞ彼等の場所に置かれて居るのであつて、且つ其の一は他の物に適應せしめられて居るのである。故に若しも或る生產要具が我々に與へられる場合には、此の事に依つて、又之に適應せる勞働者が存在して居るといふ事が自ら理解せられる。更に我々は生產要具其物の下に二大類別即ち原料と勞働器具を區別する事が出來るが、又直ちに勞働器具が正に其の能動的部分を形作つて居る事に氣付くだらう。之を以て人は原料を加工するからである。今人が其社會に斯々の器具が現存して居ると言ふならば其の事に依つて（我々は再生產の正常なる進行の場合を考へて）自然に其處には又其れに適應せる原料が存在して居るといふ事が出來る。斯くて我々は全然明白に、次の如く主張し得る。自然と社會との間の交互關係のための正確なる物質的指示器を形成するものは社會的勞働器具の組織即ち此社會の技術である。社會の物質的生產力と社會的勞働の生產性とは此技術の中に表示せられる。「骨の遺物の構造が既に亡び去つた動物種屬の身體組織の認識に對して有する其の同じ重要性を、勞働要具の遺物は既に亡び去つた諸々の經濟的社會形態の判斷に對して有して居る」。（Marx: Das Kapital. Bd. I. S. 142）「何が造られるかではなく如何にして如何なる勞働要具を以て造らるゝかが諸々の經濟的時代を區別立てるものである」。（ebenda）

我々は又他の方法で此問題の解答に達する事が出來る。我々は動物が自然に適應する事を知つて居る。然らば此の適應は如何なる點に存するかと言ふに、其れは之等動物の諸器官即ち四脚や顎骨や鰭等の變形に依つてゞある。此は一の受動的な生物學的適應である。然るに人類社會は能動的に適應する。生物學的ではなくて技

術的に適應する。「勞働要具は勞働者自身と勞働對象との間に挿入する所の、また此對象に對する彼れの活動の道具として彼れに役立つ所の一の物であり、或はそう云ふ諸々の物の複合體である。……斯くて自然物その物が彼れの活動の器官となる。即ち彼が自身の身體諸器官に附け加へ聖書の教に拘らず其身長を引延ばす所の一の器官となる。」(ebenda, S. 141. N. B.) 斯の如き方法で人類社會は其の技術の形で器官の人工的組織を創造する。此のものが社會に於ける自然との直接の能動的適應を表示するのである。即ち以上の問題を此の見地から考察しても同一の斷案即ち自然と社會との關係に對する正確なる物質的指示器は社會の技術的組織であるといふ斷案に到達する。(Bucharin: SS. 125-128)

六

蘊つて今全行程を總括的に考察すると、再生產行程なるものは自然と社會との平衡關係の不斷の攪亂及び恢復の行程である事が分る。

先づ Marx は單純再生產と擴張再生產とを區別して居る。では如何なる場合が單純再生產の行はるゝ場合であるか。

生產行程に於ては明に生產要具が消費せられる。(原料は加工せられ、機械油、掃除器具の如き補助要具が使用せられ、機械その物、工場、各種の道具が利用せられる。)他方、勞働力も亦消費せられる。(人が勞働する場合には彼は其勞働力を消費するのである。而して此事は一定の費用を必要とし、其れに依つて此勞働力は再び恢復せられる。)故に生產行程を更に進んで行ふためには生產行程其物に於て、及び其の援助を藉りて、此の行程に於て消滅に歸したるものを生產する事が必要である。例へば織物工業に於て原料として棉花が消費され、又織機が使用される。而して更に進んで生產を行ひ得る爲めには同時に棉花が栽培され、織機が製作されねばならない。或る場所では棉花が消失して織物に變換され、他の場所では織物が消失して（勞働者に依つて消費せられる如き）棉花が生ずる。或場所では織機が消失して他の場所では其れが作り出される。換言せば或場所に於て消費せらるゝ所の、生產に必要なる要素は他の場所に於て生產せられねばならない。即ち生產のために必要なるものゝ不斷の補償が行はれねばならない。而して此の補償が消失せるものと正確に同じである如く行はれた場合に我々は單純再生產が爲されたと言ふ。此場合は、社會的勞働の生產性が同一の狀態に停滯し、生產力が進歩せず社會が進歩も退歩もしないといふあの場合に符合する。そは容易に理解せられ得る如く社會と自然との固定的平衡關係の場合である。茲に斷えず平衡の攪亂（產出せられる生產物が消失するといふ）と其の恢復（其れが新しきものに依つて補充されるといふ）が生ずる。併し此の恢復は同じ基礎の上に行はれる。即ち消費せられたと丁度同じだけが生產せられ、其れと同じだけが再び消費せられ、又再び丁度同じだけが生產せられるといふ樣に再生產は常に同一の舞踏を反覆する。

生產力の增大の場合にはやゝ之と異なる觀を呈する。其時には我々が既に見た如く、社會的勞働の一部が解放せられて社會的生產の擴張（他の新しき部門、古き部門の擴張）、に轉向せられる。即ち以前に存在して居た生產の要素が生產せられる許りでなく、新しき要素が生產の領域に投入される。生產は同一の道を繰返さず同一の循環を行はずして、より廣汎に擴げられる。こは擴張再生產の場合である。人は茲では

平衡が違つた形で恢復せられるのを見る。消費せられたものよりもより多くが生產せられ、より多くが消費せられ、更に夫よりもより多くが生產せられる。平衡は其の都度より新しき、より擴張せる基礎の上に現出する。こは積極的記號を持つ所の（即ちプラスの）流動的平衡關係である。

最後に、第三の場合は生產力の衰頽に依つて生ずる。此場合には再生產行程が退步し生產せられるものが次第次第に少なくなる。即ち消費せられるものよりもより少く生產せられ、より少く消費せられ更に夫よりもより少く生產せられる如きである。此場合にも亦再生產は同一の循環運動を反覆しない。併し其の都度により廣き生產の領域が獲得せられるのではなくて、反對に、此の領域は次第に狹められる。從つて社會生活の基礎は次第次第に狹められる。社會と自然との平衡關係は新しき基礎の上に恢復せられるけれども、而も此の基礎は漸次縮少せられる。同時に社會その物は此の常に益々縮少する所の生活基礎を彼等の生活基礎の部分的破壞の方法に依つてのみ自らに適應せしむる。こは消極的記號を持つ所の（即ちマイナスの）流動的平衡關係である。此場合の再生產を消極的擴張再生產若くは擴張不足生產と呼ぶ事が出來る。

さて我々は樣々な方面から此問題を瞥見した。そして其の何れに於ても同樣の事が指示せられて居る。結局問題は社會と自然との平衡關係の性質に歸着する。而して生產力は此の平衡關係の正確なる指示器として役立つものであるから、我々は其れに依つて平衡關係の性質其の物を判斷する事が出來る。從つて又同じ事が社會の技術に就いて言はれ得るといふ事は明かである。（Bucharin: SS. 129-131）

七

總て前述せる所から必然的に次の如き科學上の規定が生じ來る。社會や社會の發展條件や社會の形式や社會の內容等を考察するに當つて人は此等の考察を生產力の分析を以て又は社會の技術的基礎を以て始めねばならない。此の斷案を確保する爲めに右の解釋に反對する異論の二三に就いて考察して見樣う。

先づ第一に唯物論の立場から爲されたる異論として Heinrich Cunow の其れを擧げよう。思ひらく、技術は「結局自然條件に結び付けられて居る。例へば一定の原料の存在は概して或種の技術の發生が可能なりや否や、又其れが如何なる方向に發達するやを決定する。一例を以て示せば、或種の鑛石や木材や金屬や纖維や貝殼の缺乏せる地方の住民は自ら獨立的に、此等の原料を加工する事や又之から道具や武器を製作する事を知り能はぬのは自然である」。と（Cunow: „Neue Zeit" 39. Jahrg. II. Bd. S. 53 ff）論者も亦此の所論の初めに於て自然的關係の影響に關する例を引證した。然らば何が故に此點から出發しないのであるか。何が故に方法論的出發點を正に自然の中に求めないのであるか。自然は洵に疑いもなく略〻 Cunow が思惟せる如き意味に於て技術に影響して居る。他方自然が社會より以前に存在して居たといふ事は又何人にとつても明白である。若しも我々が技術的器具を以て人類社會の基礎であると考へるならばこは正しき唯物論を破壞し去るものではないか。

併し乍ら斯の如き議論が何が故に正當でないかを理解するために此問題をもつと注意深く考察する事が必要である。例へば炭層なき處に於て一塊の石炭すら得られないのは當然ではあるが、併し石炭は又不幸にして指を以て地から掘

出す事は出來ない。就中若しも人が一度び石炭の有用性を知るに非ざれば其れを得來る事は至難である。原料は決して Cunow の思惟する如く自然の中に生ずる事はない。原料は Marx に遵へば勞働の產物である。其れは恰もラファエルの繪畫やクノー氏の胴衣が然うでないと同じ樣に、決して自然の胎內に生ずる事は出來ない。(Cunow は茲で原料と諸々の勞働對象とを混同して居る。Marx は次の如く言つて居る。「之に反して勞働對象が既に謂はゞ過去の勞働に依つて濾過されてある時に我々は之を原料と呼ぶ。∴總ての原料は勞働對象である。併し總ての勞働對象は原料と言ふ譯ではない」。Das Kapital. Volksausgabe, SS. 134-135) Cunow は材木、金屬、纖維等が原料として役立ち得る爲めに適當の技術を必要とするといふ事を全然閑却したのである。若しも技術が發達して其の力に依つて石炭を深き地底から發掘して日光の下に運び出す事が出來たならば、其時に初めて石炭は原料となる。原料供給といふ樣な意味での自然の影響は自ら技術の發展の一結果である。如何となれば技術が石炭を獲得し來らざりし限り此石炭は何等の効用を有するものではなく、又技術が鐵鑛を探知せざりし限り此鐵鑛は昏睡を續けて之れが人間に對する影響は同樣に皆無であつたからである。

人類社會は勞働對象としての自然の中に働き且つ之に働きかける。そは一點疑ふ可き餘地を存しない。併し自然の中に存在する所の要素は此場合に多少不變的のものであるから之を以て變化を說明する事は出來ない。變化するものは社會的技術である。それは自然の中に存在する所のものに自らを適應せしめる。斯くて技術が可變のものであり且つ實に技術の此の變化が自然と社會との關係の變化を喚起するものとすれば社會的變化の分析の爲めの出發點も亦茲に橫はらざる可らざるは明かである。(Bucharin. SS. 131-133)

八

社會的發達の叙上の見解に對する異論の第二のものは人口增加の決定的根本的意義を强調する所のものである。曰く人口增殖の必然性は實に牢乎として人間の性情の中に橫はつて居る。我々は其れを既に人類社會以前に見出す。そは社會的經濟に先だちて存在した所の自然的、動物的、生物學的行程である。然らば此行程が正に全發展の基礎を爲すものではなからうか。社會的發達の進行は實に人口增加の密度に依つて決定せられるものではなからうか。

而も法則は茲では全く反對であるといふ事が容易に理解される。即ち人口の數的增加の可能は自ら生產力の發達程度に若くは同じ事ではあるが技術の發達程度に倚據して居る。人間の數の增加(それは多かれ少なかれ不斷に增加する)は實に社會組織の擴張及び增大に他ならない。然るに此の增大は社會と自然との關係が好適に變化した時にのみ可能である。大なる人口は社會の生活基礎の擴張なくして生活する事が出來ない。又反對に生活基礎の制限は必然的に人口數の減少を作用するに相違ない。然らば如何なる方法で斯の如き事が生ずるか、產兒數の減退に依つてゞあるか、人工的產兒制限に依つてゞあるか、疾病に由來する所の住民の絕滅並に死亡數の增加に依つてゞあるか、若くは有機體の早老的消耗及び平均壽命の退步の結果としてゞあるか、だが之等は別箇の問題である。社會の生活基礎と社會の範圍との間の此の根本的關係は種々の方法で其の活路が開かれて居るのであ

る。

若しも人が人口增加を目して純然たる生物學的增殖行程であると考ふるならば全然誤りである。此行程は總ゆる可能なる社會的狀態に依つて左右せられる。即ち階級別に、此等諸階級の地位に、從つて又社會的經濟の形式に依つて左右せられる　然るに社會の形式、其の構造は生產力の發達程度如何に倚據して居る。茲に於て何人も察知し得る如く技術の發達と人口の變動即ち其の數の變化との關係は全く左程に簡單ではない。只粗雜に考ふるものゝみが其れが人間の增加とは動物の增加に於けると同樣に原始的な簡單な關係にある事を信じ得るのみである。例へば一社會に於て人口が增加するためには生產力が增加しなければならない。然らざれば餘剩の人口は生存し能はざるに至るからである。併し乍ら他方物質的富の增加は其の結果として常に、又總ゆる階級に對して、必ずしも人口の增殖を招徠するものではない。例へば無產階級の家族が困難なる生活條件の爲めに人工的に產兒の數を制限するが如き、上流社會の婦人が容姿の衰ふるを恐れて其の母權を放擲するが如き又佛蘭西の農民が相傳の資產を分散せざらんが爲めに二人以上の子女を持つ事を欲せざるが如き、之れ我々の眼前する所である。斯の如くして人口の變動は社會の形式と個々の階級及び團體の狀態とに遵ひ、社會的條件の全系列に依つて左右せられる。

要之、社會に關して我々は次の如く言ふ事が出來る。疑ひもなく人口の增殖は生產力の發達を豫想する。更に特殊の時代、特殊の社會形式諸階級の特殊の地位は人口變動の特殊の法則を喚起する。「抽象的（一般的の、或一定の社會形式に倚據せざる……Bucharin）人口法則は人類が、歷史的に干涉せざる僅の動植物にのみ存する。……總ての特殊的歷史的生產方法はそれの特殊なる歷史的に妥當なる人口法則を持つて居る。」（Marx: Das Kapital. I. Hamburg. S. 596）然るに歷史的生產方法即ち社會の形式は生產力の發達即ち技術の發達に依つて決定せられる。從つて人口變動の法則が決定的のものなのではなくて、生產力の發達と此發達（若くは衰頽）の程度如何が人口の發達を決定するものであるといふ事になる。（Bucharin: SS. 135-137）

以上は Marx の唯物史觀に於ける生產力を中心として社會と自然との平衡關係を論じたる Bucharin の所說の大要である。猶ほ彼は此章の最後に於て、前記二異論の辯駁に續いて第三の異論として社會的發達の原因を人種的不平等に歸せしめんとする說を擧げ、其の誤謬を指摘して居るけれども、叙上の問題に關する限りに於て此反駁は左程重要でないと考へるので筆者は之を省略し樣うと思ふ。（終）

生產的及び不生產的なる語に就て（五）

榎本鑛治

三十三

前號末尾に記述し置けるが如く、ジェヴンスは其の主著「經濟學純理」に於て所謂生產的勞働說及び生產的消費說に全然言及しなかつたのである。然るに彼の死後フォックスウェル敎授（H. S. Foxwell）及びジェヴンス夫人の手に依て整理せられ、之にヘンリー・ヒッグス氏の序文を附して一九〇五年に公刊せられたる遺稿「經濟學原理」中には、如上の二說が相當に論述せられ